

「正氏出世始」とその特色

鳥居フミ子

ここに掲載する「正氏出世始」は「糸井文庫」所蔵の絵入り六段本である。「糸井文庫」は京都府与謝郡岩滝町出身の銀行家糸

井仙之助氏（明治七年五月二十日生、昭和二十四年二月一日没）

による丹後地方の郷土資料を中心とするコレクションで、昭和二十四年一月に舞鶴市に譲渡されたものである。当初は舞鶴市立西図書館に保管されていたが平成二年十二月より舞鶴市教育委員会の管理下に移された。

「正氏出世始」は古浄瑠璃「さんせう太夫」の一本である。従来本書については紹介されたことがなく、『国書総目録』『古典籍総合目録』などにも掲載されていない。説経「さんせう太夫」の浄瑠璃化の様相が知られる絵入り本である。

凡例

- 一 本文はすべて原本通りとし、文字は新字体によった。
- 二 本文は読み易くするために改行をし、句読点を施した。
- 三 原本の各丁の表裏の終りには、「」印を付して別行とし、その下の（ ）の中に、丁付を漢数字で、実丁数を算用数字で示し、表・裏の略号オ・ウを記した。
- 四 破損のために判読不能の本文は、推定字数を□で示した。なお、寛文七年板「さんせう太夫」によって本文を推定した場合（ ）内に記した。
- 五 挿絵の数え方は半丁（一頁）ごととした。

書誌

装幀 中形本 縦十七・五糎×横十三・〇糎

表紙 替表紙 黒色無地

題簽 替題簽 薄茶色 双匡郭 縦十一・五糎×横二・五糎（匡

郭内 縦十一・〇糎×横二・一糎）「正氏出世始」と墨書

中央貼付

匡郭 縦十五・九糎×横十一・九糎

内題 正氏出世始

行・丁数 十七行九丁（卷末一丁分落丁）

板心 上部に「さんせう」、下部に丁付「□、□、四、五、六、

七ノ八、九、十、十二」

刊記 終丁欠のため不明

挿絵 六頁分（見開き三図） □1ウ・□2オ、五4ウ・六5オ、

九7ウ・十8オ

絵師 未詳

節譜 なし

印記 内題下に「糸井文庫」の長方形朱印一

正氏出世始

初段

さても其後、爰にあふ州五十四くんのあるしをは、いわきのは
ん官正うち殿とそ申けるか、みかとの御かん（きかうむ）り、つくし
へる人と聞へける。（しのぶ）におはします、みだいきんたちは有つ
れ／＼の事成に、つし王殿みたい所に近付、いかに母（上様、いきと）
しいける物こと、父よ母よと御さ有か、あねのあんしゆとそれか
しに、父と云ちは御さなきか。母は聞召、御身（みかとの）みかとの
ちよくかんかふむり、つくしにる人と成給ふ。つし王聞召、其き
にて候は、姉のあんしゆと某に、御いとまたひ給（みつ）上
るへし。みたい聞召、さ程に思ひ立ならば、（みつ）から共に上ら
と、御めのとうは竹一人御供にて、忍ひやかたを出給ふ。
□ひの空、あちこの国なをいのうらに着給ふ。
日もくれ方の事成に、宿取給へうは竹。なをい千けん（せん）の所
□れ共、宿かす者はなかりけり。みたい聞召、扱もしや
けんの此さと、さめ／＼となき給ふ。
かゝる所に、はまち□い所に近付、いかにたひ人、
此所と申は、しひ第一の所なれと、一人あしき者有。是かこくし
へもれ聞へ、
□けんさいくは也

と、あれにせいさつ立て候へは、御宿参らする□あれに□
(へたる)

くろも□
(あれにて一や)を御あかし、何くへも御通

りと語りすて□^(そ)通りける。

(かのはしに成し)

かは、北よりもふくかせをうは竹しのかせ、

中に兄弟ふし給ふ

□あんにかはす四人の人、せんこもしらすふし給ふ。先

おこさんと

山からうははみまいさかり、いけか□^(ら)大しやまい上り、よなく

(あふ)

はしの人々やと、かたりすてゝ通□^(あふ)けの橋と申也。いた

ましとは思へ共、おち

□ひらにとかり給ふ。太夫承、かなふ

ましとは思へ共、おち

□^(1オ)

挿絵 第一図 □^(1ウ)

挿絵 第二図 □^(2オ)

御宿を参らせたり、はんのけつかうもてなせ。うは聞て、御みの若き時の事、未忘れ給はす、御宿との給ふか。水からにはおいのいとまたひ給へ。太夫聞、ことはおやの十三年、しひの御宿参らせしに、それをしきか。うは聞、しひの御宿ならはいか程も参らせん。太夫悦、はまちをさしてくたりける。

うはは中のていにまはり、いかに上郎様、只今御宿叶ふましと申せしか、我も女のみ、さそやにくふ思し召んか、あの太夫は人かい舟のあいををみ、何くへもうられ給ひなん、うらめしの者共と思召んかなしさに申たり。申所に太夫はまよりかへり、いかに上郎様、近き比都へ御上りかと申せは、みたいうんめいつきぬれは、今か初と仰ける。今か始の事ならば、ふなちを召れ候へ。太夫かよきしんそう持て候ゆへ、こき出してよき舟にひんせんかふて参らせんと、人々を友ないて、はまちをさしてくたりつゝ、四人の人をのせ申、ろひやうしふんておす程に、よのまに三里おし出し、おきをみればかすかに舟二そうみゆ、一そうはみやさきの三郎、又一そうはさとの二郎か舟、をことか舟か、山岡、何といせんのやくそくか、それこそ是と右のを、大ゆひ一つ折たるは、四人有と覚へけり。其時みやさき、其きなら五くはんにかはんとねをなす。二郎聞、おこと五貫にかうならば、六貫文にかはん、我かはん、人かはんとことはろんに成しかは、太夫舟にとひのり、いかに二そうのせんとうよ、こへな立そ、とりかたつ、某よきにうりついてゑさせんと、二そうの舟に打うつて、太夫は宿にそかへりける。

去間、二そうの舟、五町か程はるいせんし、北と南へおしわくる。みたい御らんし、いかに舟とう、あの舟と此舟は同みなとへつか

ぬかや。さとの二郎承、扱は上郎御そんしなきいたはしや、此舟はさとか嶋へかふて行、あの舟は宮さきへかふて行、こんしやうのいとまこい、なこりをしみ給へ。みたい夢の心ちにて、いかに兄弟、此世のきへんくちせすは、又こそめくりあふへきそ、さらは／＼とたかいにあこかれ給へ共、舟はうき木の物なれば、たかいのすかたとをさかり、かけもかたちもみへされは、いたはしやみたい、天にあふきちにふし、りうていこかれなき給ふ。

爰に哀れはうは竹也。付そい申は御をんの主、又行ききもお主にて、同ほうはいといわれなは、みたい様さそや心くるはしく思されん、しよせん身をなけんと思ひ、西に向ひ手を合、なむや西方みた如来と、心の内にくはんねんし、なをいかうらにとんて入、ついにみくす」(□2ウ)

と成にけり。

みたい夢共思はれす、ち色のそこを打なかめ、やれうは竹よ／＼と、りうていこかれなき給ふ。御泪の隙よりも、兄弟にはなれ、つへ共頼しうは竹は、むなしくなりて有ければ、友にゆかんと思召、身をなけんとし給へは、二郎大きに腹を立、女を失ふたによにもむねんと思ひしに、めにものみせんといふまゝに、高手こてにいましめ、ふなはりにからめ付、ろかいを持てさん／＼に打、かせにまかせて急ける。程なくさとに付しかは、有山はたにつれ

行て、あしのすぢをたち切、あはの鳥をおはせける。いたはしやみたい、思ひもよらぬしつかはさ、ならはぬ下しよくと云ながら、なるこのつなに取付、あはの鳥をおい給ふ。あんしゆこいしやほやれほふ、つし王こいしやほやれほふ、鳥も生有物ならば、おはすと立てゑさせよと、泪の雨はたへもせず、むねのけふりのくもりにや、両かんをなきつふし、明くれ鳥をおい給ふ。みたい所のこゝろの内、あはれ也共、中／＼申斗はなかりけれ。

二たんめ

これは扱置、宮さきの三郎は、たんこの国ゆらのみなとさんせう太夫かもとに十七貫文にかい取。太夫悦ひ、名をは何と申そ。姫君は聞召、定まる名とて候はす。太夫聞て、そのきならば国なを付てつかふへし、国はあつくそ。姫君聞召、あふしうしのふのこをりと仰ける。太夫其きならばあねをしのふと付也。忍ふに付はわすれ草、弟はわすれ草と付る也。先あねのしのふは明日に成ならは、はまにさかり、日に三かのうしほをくみ、太夫をはこくめ、又弟のわすれ草、是よりをく山にわけ入、日に三かのしはをかりて参るへし、五かうの天もひらくれば、参らせ道くは何／＼そ、^(脱カ)をけとひさく、かまとかこを給はりて、太夫は内に入にける。去

間わか君は山のかたにましますか、はまのかたを打なめ、あの白浪はおなみのしほをうたせ、めなみのしほをくむと聞、いたはしやあねこ様、めなみをなもしり給はて、しほ風にもまれ、さそさむからんいたはしやと、さめく／＼ないてをはします。

かゝる所へ山人共かへりしか、若君をみるよりも、あれこそさんせう太夫か今参りのわつは也。ゑこらぬ物ならば、しやけんの太夫三郎か、一打つゝと思へ共、一めいとられんちてう也。人をたすくるはほさつの行と承、いさしはくはん進いたさんと、少つゝかりてわつはにもと申ける。わか君は聞召、それかしはしはとやらんは持たる事御さなきとあれば、人々けに断やいさ持てゑさんと、めん／＼のにの橋につけ給ふ。おも^(にこ)□□□(四3才)付とは此時よりも申とかや。

いたはしや若君は、三かのしはを太夫か本に付給ふ。三郎立出、しはをかたてに引さけ、太夫か前に参、是御らん候へ、けさ迄しはもゑからぬ由申せしか、所ならいによくかりて候。太夫そのきならば三かはむやく、十かからせよ。三郎承、三かのしはに七かまし、十かかれとの御てう也。いたはしや若君は、姉子のむかいに出給ふ。いかにあね上様、水からかしはとやらんもゑからねと、山人の情により、けふのやくはつとめしか、いつくしきをとかそとて、三かのしはに七かまし、十かかれとの仰也。三かに云て給

はれとさめ／＼となき給ふ。あねは聞召、水からもしほとやらんもゑくます。をけとひさくを浪にとられしか、はま人の情により、けふのやくはつとめしか、あすはしらぬよ弟よ。聞は二郎殿、しひ第一の人と聞、三かにわひてゑさせんと、兄弟打つれ参らるゝ。二郎殿に成しかは、三かにやすふわひ給ふ。

扱三郎は太夫に参、今日のわつはかしは、所の者にくはん進せしと承る。某ふれんと白への長刀をつ取、ゆら千間を、さんせう太夫か今参りにしはをかりてゑさする者あらは、あたり七間さいくはたるへしとふれたりける。おにかといわぬ人はなし。

それよりも兄弟は、太夫の元を立出て、別れの辻に成しかは、山とはまとなきわかれ、何様三郎かふれたる事なれば、きのふにけふは引かへ、しはくはんしんはなかりけり。され共なさけの山人に、かまてをならい何木共しらす、木を一本取給へと、いはらうつろに引かゝり、しんたいに及はねは、しよせん有てはかいもなしと、すてにしかいとみへけるか、まてしはし、はまにましますあね上様、御いとまこい仕、其後いかにもならんと思召、はまちをさして下らるゝ。

是は扱置ひめ君は、おけとひさくを浪にとられ、あきればてゝをはします。若君御らんして、する／＼と走より、弟参りて候。姉君御らんし、兄弟なればこそ、我身のやくをとゝのへ、姉の向ひ

に参るよな、母上もろ共ましまさは、さそうれしく思しめさん、あらうらめしの次第とて、さめ／＼となき給ふ。つし王は聞召、その事にて候、今日はしくははんしんも候らはす、我わざに叶はねは、いかにもならんと思ひ、御いとまこいに参りたり。姫君は聞召、それは誠か物うやな、扱みつからも、をけとひさくを浪に取れ、今は身をなけんと思ひしにまて」(四三ウ)

は待ゑたりれしよ、いさ身をなけんと岩はたに、互にてに手を取くみて、すてかうよとみへし時、いつくよりかは来りけん、いせの小はきはをしとめ、その日のやくをとゝのへて参らせつゝ、太夫か家地にかへらるゝ、かの兄弟の御なけき、いせの小はきは情^(は脱カ)のと、かんせぬもの社なかりけれ。

三たんめ

去間、月日にとまらぬならいとて、その年もやう／＼くれ、大晦日になりける。太夫は三郎を近付、あの兄弟の者共は是よりをく^くの者なれば、正月と云事もしらす。只明くれ父母こいしとなけく物ならば、年中のほうむらのたね、兄弟のやつはらを、三の木戸のさきにしはのいほりをつくり、年を取せよ三郎とそ仰ける。三郎承、兄弟を打つれ、三のきとの口にしはのいほりをつくり、

年を取するに、兄弟のくとき給ふそ哀也。

われらか国のならいには、いみやいれいの者こそは、へつやに置と聞て有。何のいまれのなきものを、へつやに年を取するか、是かたんこのならいかや、いかに弟、太夫にとけての奉公は成ましそ、此国の初山、十六日と聞て有、山に出る物ならば、姉にいとまこはす共、すぐにをち、世に出てめてたくは向ひのこしを給はれの、あねにおちよ弟にをちよ、おちよをちしのもんとうを、しやけんの三郎やふに小鳥をねらいゐて此事を聞、急太夫に参、三のきとの兄弟かをちよをちんともんとうす、今にをちんと存る也。太夫聞て、其きならは急てつれ参れ。承て三の木とに使たつ。いはしや兄弟は三郎と打つれ太夫のまへに出給ふ。太夫みて、いかに兄弟、汝十七貫にかい取、あたへ程もつかはぬに、もはやをちんと申か、いかに三郎、いつくへおちても太夫ふたい下人とうふ様に、ひたいにしろしをせよ。しやけんの三郎承、いてしろしをいたさんと、天上よりからこのすみをおろし、めう火にあふき立、しこのまるね取出し、まつかいにやきたて、いたはしや兄弟のひやくかうに十もんしにそあてにける。太夫みて、いかに三郎、兄弟のやつはら、是よりはまちにさかり、松のき舟の其下にて年をとらせよ。三郎承、兄弟を引くして、松の下にそ□す。あらなさけなや兄弟は、くとき事こそ哀也。わらはか国のならいに

は、六月のたつて晦日に、なこしのわに入とこ」(五4才)

挿絵 第三図 (五4ウ)

挿絵 第四図 (六5オ)

そ聞つるに、是かたんこのならいかや、さむいかやつし王と、あねは(弟にいだ)き付、りうていこかれなき給ふ。

是は扱置、二郎殿しひ第一の人なれば、父母兄弟のめを忍ひ、よる／＼しよくしをあたへらる。かくて太夫は三郎を近付、きのふけふとは思へ共、正月十六日に成ぬ。人の命はもろき物、兄弟をみて参れ。承てはまちに行みて有は、いたはしや兄弟は、土の色にそなれける。三郎は打つれ、太夫か前にそ出給ふ。太夫みて、命めてたき兄弟哉、山へもはまへもゆけと有。あね君は聞召、いかに太夫様、山へならははまへ成共一所にやりてたひ給へ。太夫聞て、いかに二郎(三ノ誤カ)、あねたに山へゆかふなら、かみを切大わらはになし山へやれ。三郎承、いたはしや姫君のくろかみを、もとゆいきはよりふつと切、あつはれよきわつはやと、下しよくの道を渡し、山へ行との御てう也。

去間、兄弟は打つれ山へのほらる。山にもなれば、いかにつし王、はたの守ちそうほさつをおかみ申事もなし、いさやおかみ申さんと、と有岩はなに立置、兄弟はゆんでめてに立わかれ、さても／＼なさけなや、母上様の仰には、兄弟か身のうへに、しせん

大事有時は、身かはりに立給ふと承て候。兄弟か身の上にこんとのやきかね程よにも物うき事あらし、何とてちんし給はぬそ、かなりはてゝ候へは、神のつな仏の御へんも切たよな(とノ誤カ)、うらみこかれてなき給ふ。何か扱、からたせんちそうほさつの事なれば、兄弟のやきかね一とにさつと取給ふ。兄弟めとめをみ合、やきかねなきそ弟々と、ちそうほさつをみ給へは、有／＼と付給ふ。か程きたいの御きとく、ほんふのみとてあさましや、此まゝ太夫にかへりなは、又あてんはちてう也。本のことくもとてたへと、かたんくたきいのれ共、二度かへしはなかりけり。有かたの次第とて、本のことくにおさめ、いかにつしわう、是をものいの門出に、是よりすくにおち給へ。此ちそうほさつをゑさするそ。汝おちし物ならば、おつてかゝるはちてう也。か様にうす雪ふる時は、わらんすをあとをさきにはき、つへゆんでにつきゆけよ。上れは下る、下れは上るとみゆる也。はや／＼をちよつし王と、立わかれ給ひつゝ、太夫かもとへかへらる。兄弟のわかれのほど、物の哀れは是也と、かんせぬものこそなかりけれ。

四たんめ

「(六5ウ)

いたはしやひめ君は、太夫にかへらせ給ひける。太夫みて、いか

にしのふ、なんしは弟にまし、よきしはこりてまいりたり、弟は
いかにといふ。ひめ君は聞召、けさ水からか山ちへともない申せ
しに、くち成あねとつれんよりと、山人とつれ、おく山にまいり
しか、おさなきものゝ事なれば、しゝ道にまよい候かと、さめ
／＼となき給ふ。太夫みて、いかにしのふ、それ泪にあまたしな
か有。汝か泪と申は、弟を山よりおとし、悦なみたとみへて有、
いかに三郎、あの女せめてとへ。三郎承、いたわしやひめ君を、
ゆせめ水せめしたりける。これ更にをちされは、やからを持てつ
かい／＼をまいたりける。是にも更にをちされは、天上よりから
このすみをおろし、大にはにをこし、あなたへひいてはあつくは
をちよ、こなたへひいてはあつくはをちよ、おちよ／＼とせめに
ける。せめてはつよし、身はよはる、十六さいを一ことし、朝の
露とそきへ給ふ。

太夫みて、をとしのためにせめければ、命もろき女かな、いかに
三郎、おさなきものゝ事なれば、とをくへは行まし、いそきおつ
てをかけよとて、太夫てせい六十五人、二てにわけておつかくる。
いたはしや若君、たにみねさして落たまふか、今はあね君を打た
ゝくかと、あとに心をおくれとも、急道とて今ははや、こくふん
しのゑんにさしかゝり、いかにおひしり、跡よりおつてかゝる也、
かけをかくしてたひ給へ。おひちり聞召、おさなきものゝふんと

して、いか成とかを仕、跡よりおつてかゝるそや、かたれ、かけ
をかくしてゑさせんそ、我君は聞召、命が有ての物語、先かくし
て給はれ。おひしりけにもと思召、めんそうよりふるきかわこを
取出し、その中にとうと入、たつなはよこなはむすとかけ、三め
んたるきにつり置、さらぬていにておはします。

はや太夫一もんこくふんしにはせ付、太夫はおもてのもんにとを
めつかふていたりしか、五人の子共みたれ入申様、いかにおひし
り、此寺にわつはを一人みゐれて有、わつは出し給へ。ひちり聞
給へと、そらみゝつふしをはします。三郎参りよつて、はおひし
り聞召、何と候一はん時のたんなどの給ふか。三郎聞て、時のた
んなはおつての事、先わつはを出し給へと申。ひしり今こそよく
聞て候。三郎殿、此そうは百日のへつ行こそせいに入候へ、わつ
はやらすつはやらん、はんはせぬとそ仰ける。三郎聞て、にくき
ひしりの仰かな、そのきならは寺をさかさんと申ける。おひちり、
いか程成共お(さかしあ)れ、寺をあけてわたすへし。身のかろき三
郎かさ(七ノ八六才)

かす所はとこ／＼そ、大天上小天上、ないしん、なけし、くり、
めんそう、仏たん迄さかせ共、わつはは更になかりけり。あらふ
しきのわつはかな。只ひちりの心の内にわつはなふてかなふまし、
わつは出し給へ、さなき物ならは、身にあまれる大せいもんをた

てあれとそ申ける。ひちりは聞召、せいもんならはいか程もたて申さん、心やすかれ太夫三郎と、はやせいもんにかく斗。そも／＼此ほつしと申は、此国の者にてなし。それ本国はたん州ひかみのこほり、やすのちとうの惣れうなるか、七才の年よりも、はりまのしよしやに上り、十三にてけさをかけ、廿にてかうさへ上り、をさなき時よりならい置たる御経はとれ／＼そ、いこん、あこん、ほうとう、はんにや、ほつけ、ねはん、大はんにやか六百くはん、ならひに五ふの大そう経、やくし経、くはんおん経、あみた経、かすをつくして七千よくはんにしるされたり。万のつみのめつする経、けつほん経、しやうとの三ふ経、くしやの経か卅二くはん、天たいか六十くはん、ほけ経か一ふ八くはん、廿八はん、もんしのなかれ、六万九千三百八十四ちにしるされたり。此しんはつあつうふかうにかふむるへし。わつはにおいてはしらぬ也。三郎聞て、いかにおひしり、それせいもんと申は、日本高き御神、ひくき小神くはんしやう申てこそ、せいもんと申せ。すれは御みのおさなき時より、はりまの寺に上り、ならい置、たんなたらしの御経つくしと云物には、大せいもんをおたてあれとせせめにける。

いたはしやおひしりは、今のせいもんたにものうく思ひしに、又せいもんを立よとは、今はわつはを出そふか、わつはを出す物な

らは、せつせうかいをやふる也。せいもん立るものならば、もふかうかいをやふるへし。せつ生かいをやふろうか。されは北の天神の、かんせう／＼にて御さの時、しへいのをと／＼にさんせられ、心つくしになかされ、ゑのき寺にてはて給ふ。そのとかによつてしへいはならくにしつむ也。かんせう／＼は今、北の天神といわれさせおはします。是はしんよりおこるもふかうかい、是は又、人をたすくる事なれば、やふらんと思召、いかに太夫、せいもんならはいか程も立申さん。心やすかれ三郎と、やかてたんをそかさりける。

それよりもおひちりは、こまのたんをかさられける。くりからふとうの、けんをのんてたきつほにとんておりたる所をまつさか様にかけられたり。月のかすをりそへて^(十二)□□本^(七ノ八六ウ)の御へいを切てこまのたんにたてられしは、只太夫一もんをせいもんのてうふく也とそみへにけり。

そも／＼うやまつて申。上はほん天大しやく、下にはしたいの天王、ゑんまほう王、五とうのめうくはん、たいしん大さんほく、下かいのちには、いせにしんめいてんせう太神宮、外くうか四十まつしや、ないくうか八十まつしや、合百廿まつしやの御神、なかにもあら神といわはれ給ふは雨の宮、かせのみや、月よみ日よみ北にさいくう、たかのこんけん、かみのやしるあまの岩とに大

日によらい、あさまかたけにふく一まんこくうそう、天の川のへんさい天、くまのに三つの御山、しんくうかやくし、ほんくうかあみた、なちによいりんくはんおん、かんのくらにりうそうこんけん、大みね八代こんかうとうし、かうや山にかうほう大し、ねころにかくは上人、ゑいさんにてんきやう大し、くわんさん大し、ちうとうやくし、ふもとに山王廿一しや、おほりにかしまあつた大明しん、みかはの国にやはきの大王、ほうらいしにみねのやくし、とをくみにきつき大明神、するかの国にふしせんけん大ほさつ、いつの国に三嶋の明神、箱ねのこんけん、さかみに大山大小ふとう明王、むさしの国にふちう六社の大明神、くはんとうにかしまかん取うきすの明神、てはにくろのこんけん、あふ州にしほかま六しやの明神、ゑつ中になて山、かゝに白山しきしの明神、のとの国にゆつる木の明神、しなのゝ国にとかくしの明神、ゑちせんしのはらといはら、ゑいへいし、わかさにおはまの八まん、たんこなれあい、きれとのもんしゆ、たしまに一のみやの大明神、たんはにおはら八わうし、つの国にふり神の天神、河内の国にほんしひらをかとなたの八まん、天王寺正とく太子十五の御神、すみよし四しやの大明神、はりまの国にわたりては、一にかんひら二にあらた、三にさかみのほうしやうし、四はんにひろむねこつ天王、さてひつ中にきひつのみや、ひせんにもきひ

つのみや、三か国のきひ大臣、只今御せいもんに立申、おぎの国にゐつくしまのへんさい天、つくしのちに入て九か国のしをこし(ゆノ誤カ)ん、惣て神のそうまん所はいつもの国の大やしる、神の父かきたかの明しん、神の母かさなかのこんせん、惣て神の御かす(か、九まん)八千七しやの明神、仏の数か一万三千よれ」
(九七オ)

挿絵 第五図 (九七ウ)

挿絵 第六図 (十オ)

い仏としるされたり。此しんはつめうはつのかうふるへし。わつはを(しつて)つゝむものならば、そのみの事はおんてもなし、一か一門六しんけんそく七世のふもに至迄、むけん三あくとうにおとされ、うかむせさらに有まし、わつはにおいてはしらぬ也と、大せいもんをたてられしは、身のけもよたつ斗也。

太夫承、しゆせうに候おひちり、けふより時のたんなにすへしと云。三郎聞て、時のたん(タマ)なはおつての事、あの一めんたるきにつつたるかはこは、かせもふかぬに二ゆるぎ、ゆんすくとうこきて有。あれをみぬ者ならば、一年中のほむらのたねとは成まいか、おもとりあれの父上いかにと申ける。太郎は聞召、いかに三郎、父こそおいにほれたり共、お殿はおひにほれまいそ。たとへかはこの中成か、わつはにてあらはあれ、今のせいもん聞からに、うたかふほうはなきそとよ。先此度は我等にめんしてゆらに帰れ、

三郎いかにと申さるゝ。三郎聞て、太郎殿のなま道心ふつたる御いけん、此ことにおいてはそのき給へと、長刀のさやはつし、かはこのなはをふつと切、中にてかなめを引て見て、わつはは有と悦び、ゑんのはしにおろし、たてなはよこなは切ほとき、ふたを明てみて有は、有かたやはたの守りのちそうほさつ、こんしきの光をはなち、三郎かまなこにきりふりかゝり、ゑんの下にこけをちたり。太郎御らんし、扱こそ申さぬ事か、当さに命を御取なきは、三郎かめうかよと、かわこをは本のこづくにしたゝめ、(ママ)二めんたる木につりおき、扱三郎は兄弟のかたにかゝり、ゆらのみなとへかへりしは、ほいなきていとそみへにけれ。

五たんめ

去間、おひしりは、扱は三郎はわつはをつれてかへるかや。つれてかへりし物ならば、此ひちりをあんをんにてはよもおかしと、かはこのほとりに立よりて、わつはは有かとの給へは、いたはしや若君は、打しほれたるこはねにて、是に有とそ仰ける。ひちりなのために思召、かはこをおろしふたをあげ、いかにおさない、御身はいか成とかにより、かゝるうきめをみるこそ、つゝます語り候へ。若君は聞召、今は何をかつゝみ申さん。某はあぶ州五十

四くんの主、いはきの判官正氏の二なん、つし王とは某也。一とせ父にて候正氏、みかとの御かんかうふり、つくしあんらくしになかされてましますよし、余りに父の恋」(十八ウ)

しさに、母をいさめ奉り、姉のあんしゆ、扱めのと一人打つれ、都へ上る折ふしゑちこの国とやらんにて人あき人に行合、母とめのとはさとか嶋へうられ給ひ、扱我々もかなたこなとうり渡され、あの太夫かてに渡り、うきの思ひをする事よ。しせんあねこの此寺へ尋来り給はゝ、都へ上りし有様、ねん比に語りてたへ、おいとま申と有ければ、ひしり聞召、扱はさ様のきんたちかや。去なから、太夫は一もんひろき物なれば、八方にせきをすへんなちてう也。某をくりて参らせんと、たひのやういと聞へける。

人めしのふのたひなれば、一めかさにてかほかくし、かはこの中にとうと入、れんしやくつかんてかたにかけ、先こくふんしを立出て、くつかけとうけにさしかゝり、東をはるかになかむれば、面白の花の都や、筆に書共よもつきし。いそかせ給へは程もなく、八丁なはてはや過て、しゆしやかこんけんたうに付給ひ、かわこをおろしふたをあげ、いかに若君、此宮と申は、古へもさる弓取の御うんひらかせ給ふ也。御よに出させ給ふへし。此度ひちりあんと御きやう書申うけまいらせ度候へ共、そのみふてうの僧なれば、思ひなからかなはずし、ひしりはたんこに帰る也、いとま

申と有ければ、いたはしや若君、かはの中よりとんで出、衣の袖にすかり付、命のをやのおひしりに、さらは形見をまいらせんと、ちそうほさつを取出し、おひしりにたひにける。ひしり御らんし、おろか也若君、こんとの一めい、くそうかはさならず。此お仏かはの中よりひかりをはなち、身かはりに立給ふ。よきにしんしてかけ給へ。そのきならはまもりかたなをまいらせん。ひちりおさへて、いかにおさない、それ弓取は生するより守り刀をさすと聞。かまへてみをはなち給ふな。出家の上のは物には、かみそりならては入ぬ也。さ程形見のくれたくは、ひんのかみを一ふさたへ、衣のかた袖まいらせんと、たかいかたみ取かはし、立わかれ給ひしか、さすか思へはかなしくて、又立かへり、たかにめとめを見合て、もろきは今の泪也。され共かなはぬことなれば、ひちりはたんこにかへられける。いたはしや若君は、よもすからこんけんにきせいをかけさせ給ひける。若君の心の内、あはれとも中／＼申斗はなかりけり。

六たんめ

「(十一 9 才)」

是はさて置都卅六人のしんか達の其中に、梅つの院と申(せしは、)
(七しゆんに)及迄、なんしにても女子にても、御子一人あらされは、

是も清水まふて有。扱御前に成しかは、梅つ是迄参る事、なんしにても女子にても、やうしをさつけ給はれと、ふかくきせいをかけ給ひ、其夜はつやと聞へける。有かたや御ほそんは枕神に立給ひ、御みかやうしに成児は、左のこもりたうに有へしと、夢の間につけ給ふ。梅つ夢さめかつはとをき、あら有かたやと行み給へは、何うたがいの有へきそ、つし王のおはしますか両かんに、人み四たい立給ふを御らんし、梅つなのめに思召、つし王殿を友ない、やかたに下向と聞へける。

御所にもなれば、御将そくを改め、御さんたいなされ、梅つかやうし、某よはひ候はねは、つきめの由をそうもん有。一さの公卿御らんし、いかに梅つ、やうし成とて、きのふけふ迄こつしきひ人のたくい也へし。たいさにはかなふましとの給ひ、はるかにおいをろし給へは、つし王今申さてはるつによにかは申へきと、した玉つくりのけいつ一巻取出し、御あふきにのせ、はるかの上に持て上らせ給へは、中にも八条殿、さつとひらきはいけん有。抑此巻物と申は、大たうにてもはしまらず。我朝にても初らす。天ちくほしのみかとに七十二代、大たうにては平しん王に五十四代、我朝に仁王四代のあつそん、正かとの御孫いはきのはん官正氏の惣領つし王丸有利はんとそよみ上たり。御門ゑいふんまし／＼、なに正氏か二なんよな。何とて正氏はけいつくらへの時此巻物を

出さぬ。なか／＼のる人ふ□□^(ひん)也。本領なれはおふ州五十四くん
下さるゝ。つし王りんしをいたゝき、五十四くんは望に候はす、

たんこ五くんを給はれと、重てそうもん有ければ、大国に小国を
かへて望は、思ふしさい有へし。りんけん出てかへらねは、たん
こ五くんは馬のかいれうにゑさするとのりんけん也。つし王有か
たしと御てんを立、梅つの御所にかへらるゝ。それより若君は、
先母上の御行へを尋んと、供人を引くしさとか嶋へそ急かるゝ。

さとにもなれは、かなたこなたを尋給い、有山はたをみ給へは、
浅ましき女性、なるこのつなをてにかけて、あはの鳥をそおひ給
ふ。あんしゆこひしやほやれほふ、つし王恋しやほやれほふ。鳥
もしやう有物ならは、おはすと立てゑさせよと、泪と共におひ給
ふ。若君は聞召、いそきはいふへ飛て入、母上にいたき付、つし

王参りて□□^(十一9ウ)

(以下欠)

特色

「正氏出世始」は説経「さんせう太夫」と同じ内容である。づ
し王がさんせう太夫の陰惨な酷使から逃れて都に上り、やがて丹
後の国司となり、佐渡へ行つて母に再会するという話である。話
の筋はづし王を中心にまとめられている。

「正氏出世始」は奥書を欠いていて正確な刊年を知ることとはで
きない。板式や挿絵の描き方などから、元禄年代のもののように
思われる。所属太夫も不明である。おそらく読みものとして板行
された絵入り六段本であろう。

「さんせう太夫」は中世においては説経として語られたもので
あるが、近世に入つて操浄瑠璃の影響を受けて人形による演出を
伴うようになり、その詞章も浄瑠璃化した。現存する「さんせう
太夫」の正本は近世に入ってから板行されたもので、次の正本が
知られている。

①説経与七郎正本「さんせう太夫」(寛永末年ごろ刊、さうし
や長兵衛板) (「寛永板」と略す。)

②説経佐渡七太夫正本「せつきやうさんせう太夫」(明暦二年
六月刊、さうしや九兵衛板) (「明暦二年板」と略す。)

③「さんせう太夫」(寛文七年五月刊、山本九兵衛板)〔寛文七年板〕と略す。

④佐渡七太夫豊孝正本「山庄太輔(外題さんせう太夫)」(正徳三年九月刊、三右衛門板)

①「寛永板」は大坂与七郎の正本である。大坂与七郎は『色道大鏡』に「説経の操りは大坂与七郎といふ者よりはじまる」とあるように、大坂で説経の操芝居を最初に興行した太夫である。②「明暦二年板」も操芝居によって興行されたものである。したがって、①②ともに説経が人形の操りを伴って劇場で興行されるようになってからの詞章を伝えている。しかし、まだ浄瑠璃のような段分けはされておらず、説経独特の言いまわしや用語があつて、古い説経の面影をよく残している。③「寛文七年板」は浄瑠璃と同じように六段に段分けが施され、浄瑠璃としての改作の手が加えられ、古い説経の面影はうすれている。③は寛文年代という古浄瑠璃隆盛期に説経浄瑠璃として改作され、流布したものである。^{注1}さて、ここに紹介した「正氏出世始」は「寛文七年板」を基にして改作されたものである。それは次のような語り出しの詞章をみても明らかである。

○ただ今語り申す御物語、国を申さば丹後^{たんご}の国、金焼^{かなやき}地藏^{じぞう}の御

本地^{ほんち}を、あらあら説きたて広め申すに、これも一度^{ひとたび}は人間にておはします。人間にての御本地を尋ね申すに、国を申さば奥州日の本の將軍、岩城^{いはき}の判官^{はんぐわん}正氏殿にて、諸事の哀れをとどめたり。この正氏殿と申すは、情^{じやう}のこはいによつて、筑紫^{つくし}安楽寺へ流されたまひ、憂き思ひを召されておはします。

〔寛永板〕^{注2}

○それおやこ兄弟のわりなき事は。さうかひよりもふかし。爰におふしう五十四くんのあるじをは。いわきの判官まさうぢ殿とぞ申ける。さる間正うぢ。みかどの御かんきかうむり。つくしあんらくしに。る人とこそは聞へける。

〔寛文七年板〕^{注3}

○さても其後、爰にあふ州五十四くんのあるしをは、いわきのはん官正うち殿とぞ申けるか、みかとの御かん^(きかうむ)り、つくしへる人と聞へける。

〔正氏出世始〕

「寛永板」が説経の古態を留めているのに対して、「寛文七年板」には浄瑠璃化の傾向が顕著である。「正氏出世始」の詞章は、「寛永板」よりは「寛文七年板」に近いことは一目瞭然で、「寛文七年板」の詞章を省略して簡潔にする方法で改作されている。

それでは、「正氏出世始」は「寛文七年板」の詞章をどのよう

に省略したのであろうか。大幅な省略の行われている箇所をあげてみよう。

□ 安寿姫についての描写が簡略化されている。

①逃亡の相談をしていた安寿とづし王が捕らえられて折檻を受ける場面では、安寿にやきがねを当てる件はなくなっている。したがって、やきがねを当てられた安寿が弟に当てるやきがねを「みづからにあて給ひ。弟ゆるして給われ」と必死で嘆願するけなげな姿は描かれない。この箇所は簡単に

天上よりからこのすみをおろし、めう火にあふき立、しこのまろね取出し、まつかいにやきたて、いたはしや兄弟のひやくかうに十もんしにそあてにける。

と、兄弟の白毫にやきがねが十文字に当てられたというだけの説明になっている。

②「寛文七年板」では、黒髪を切られた姉の姿をみて、づし王が嘆き悲しむ。安寿は弟にむかって、

兄弟なればこそ。あねかかみなき事を、かなしむよ。去ながら世がよの時のかみかたち。かく成はてゝ有ければ。かみも姿も何ならず。兄弟打つれ山へ行こそうれしけれ。

と言って毅然としている。弟を励まし力づける安寿の姿には崇高な美しささえ感じさせられる。「正氏出世始」はこの箇所を全文削除している。

③「寛文七年板」では、づし王が姉一人を置いて落ちることはいできないと言い張り、安寿がこれを説得するところが長々と語られる。「正氏出世始」では、この安寿とづし王のやりとりを省略し、安寿はづし王に地藏菩薩を手渡して、「はや／＼をちよつし王と、立わかれ給ひつゝ、太夫かもとへかへらるゝ。」と、極めて簡単に結んでいる。

「正氏出世始」では、安寿が虐待されるところを省略することによって、「寛文七年板」において説経からひきつがれていた説経独特の残酷性や悲哀感がうすれることになっている。それは説経浄瑠璃に形象化された安寿姫の人間像の強烈な印象を薄れさせることにもなっている。説経で語られた安寿姫は苦難に対して気丈に立ちむかい、試練に打ち勝っていく積極性を持ち続けた少女である。それは、平安朝以来の物語文学に登場していた受身の女性とは異り、自らの運命を自らの手で開拓していくこうとするエネルギーを持った新しい女性像ということができるとする^{注4}であろう。「正氏出世始」では、このような魅力に溢れる安寿姫の存在感が薄れてしまってい

る。それは、「正氏出世始」をづし王の物語として筋を通してうとする意図が原因したものと思われる。「正氏出世始」の安寿姫はづし王をもり立てるための単なる脇役になってしまっている。

㉒ 伊勢の小はぎが身の上を語るところが全文削除されている。説経の「さんせう太夫」では伊勢の小はぎは重要な登場人物である。伊勢の小はぎは安寿とづし王が身投げをしようとするところへ現れて二人を助ける。小はぎは、伊勢の二見浦の生まれで、売られ売られてさんせう太夫のもとへ来たことを語る。彼女の苦難の流転は「寛永板」では哀調をこめて縷々と語られている。「寛文七年板」でもその描写は簡潔にはなっているが古態をとどめている。この箇所は説経にとって重要な箇所^{注5}で、説経と伊勢の国との密接な関係を示しているとも言われている。

「正氏出世始」では、伊勢の小はぎは二人の身投げを止める役目は果すが、身の上については一切語っていない。伊勢の小はぎが説経や説経浄瑠璃において果していた役割は全く無視されることになっている。

㉓ おひじりの神おろしの詞章は極めて簡略化している。づし王をかくまったおひじりは、三郎に催促されて日本国

中の神々を勧請して大誓文を立てる。「寛文七年板」では、この神おろしは音曲的なきかせ所として長々と続いている。「正氏出世始」では、半分にも満たない長さに簡略化されている。

㉔ おひじりの都への道行文は全文削除されている。

道行文は神おろしと同様に、語りものではきかせ所として重要な部分である。母・安寿・づし王・うばの四人がつれ立って筑紫へ旅立つところも簡単に

うは竹一人御供にて、忍ひやかたを出給ふ。

「ひの空、あちこの国なをいのうらに着給ふ。」

と述べられている。「寛文七年板」では、しのびやかに旅の用意をして三月廿一日出立したことが丁寧な情況説明の語を伴って述べられている。

㉕ 「寛文七年板」では、太夫が安寿とづし王を折檻する時に、必ず三郎に対して「三郎いかに」と言って、三郎の意見を聞き、しかる後に三郎に任せてこれを実行している。^{注6}「正氏出世始」ではこれがなくなっている。すなわち、太夫は三郎に相談せずに直ちに三郎に命じて折檻をする。悪の存在としての太夫の印象は鮮明となっている。

「正氏出世始」は、づし王が正利と名をあらため、国司となつて佐渡に渡り、盲目の鳥追う女に会うところで終っている。そのあとの一丁分は欠丁である。

欠丁の分を「寛文七年板」でみると、正利は鳥追う女が母であるとして、母との再会を果し、ついで丹後の国分寺を訪れておひじりに対面し、さんせう太夫と五人の子供に報復することになる。五人の子供にさんせう太夫の首をひかせるという残酷な場面は「正氏出世始」ではどのように扱われていたか不明であるが、安寿への残忍な加害の場面が省略されたと同様に酸鼻を極めた首ひきの場面も簡単に扱われたのではなからうか。そして、「寛文七年板」と同様に、づし王は父と共に本国に帰国し、再び富貴に榮えることになり、それを寿いでこの話は終ることになっていたのであろう。

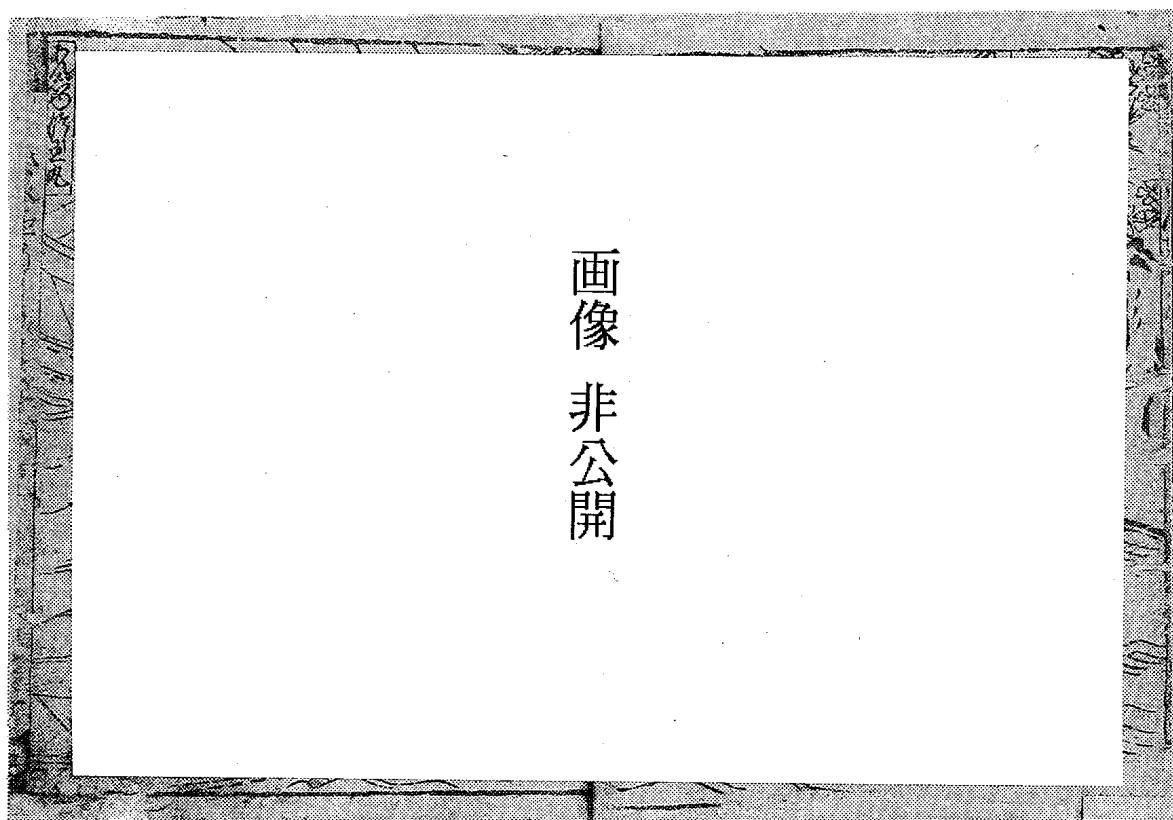
「正氏出世始」は「寛文七年板」で扱われたづし王が平将門（正門）の孫であるという素性をあかすところを略すことなくそのまま受けついでいる。全体を、将門の孫、づし王の世に出るまでの話としてまとめている。前にあげた「寛文七年板」からの省略箇所は、「さんせう太夫」を「づし王の出世譚」としてまとめるために捨て去られたものである。「づし王の出世譚」となった「正氏出世始」は、説経の古態を残存する「さんせう太夫」とは

根本的に性格を異にする絵入り六段本となっている。それは説経浄瑠璃から読み本浄瑠璃への転身であった。

題名にある「正氏」とはづし王の父岩城判官正氏のことである。「寛文七年板」では帝の勘気を被って筑紫に流された正氏は、世に出たづし王、あらため正利と共に本国に帰国して、御所を建て、富貴に榮えることになる。この経緯をふまえて「正氏出世始」と題したのであろうか。内容からみると、本書の題名は、むしろ「正利王出世始」とする方がふさわしいように思われる。

画像 非公開

巻 頭 (□1オ)



画像
非公開

挿絵第二図 (□ 2 オ)

挿絵第一図 (□ 1 ウ)

あんじゅつし王丸

あんじゅの前

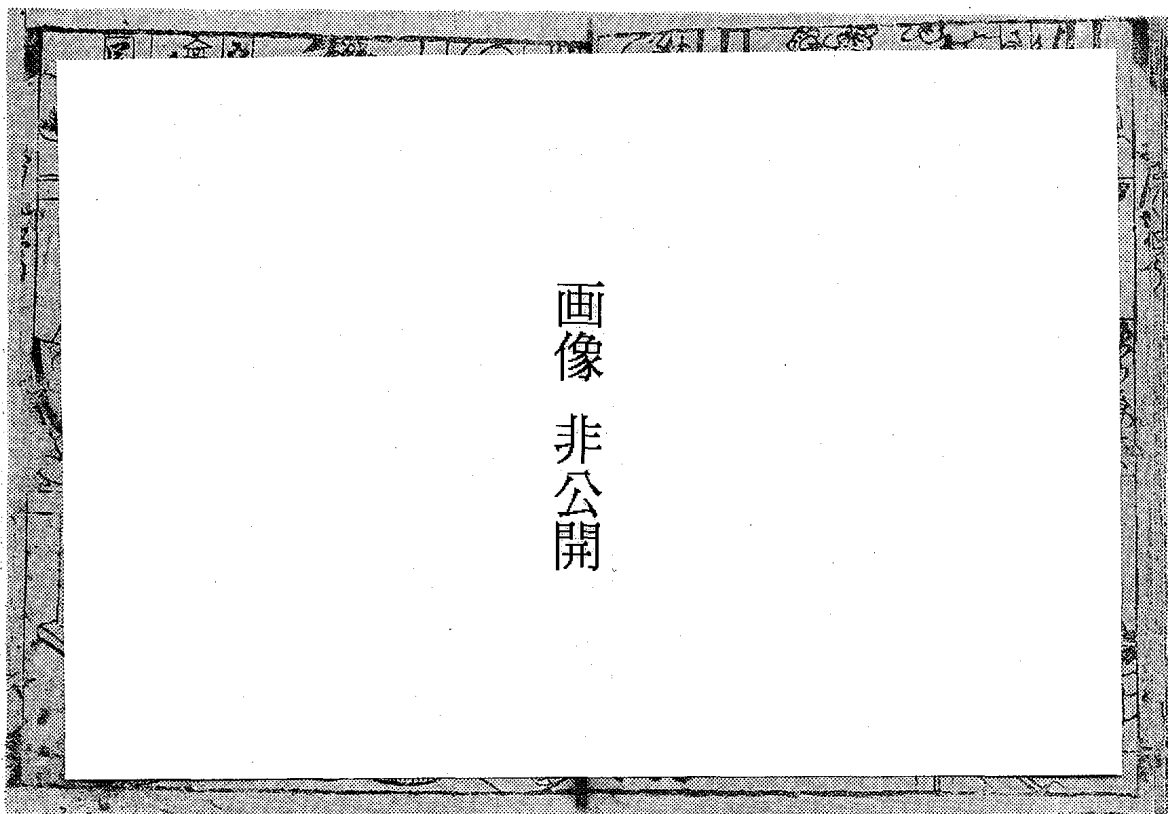
宮さきの三郎

山おかの太夫

はうへなごり

つし王丸

めのとうば竹



挿絵第四図（六五オ）

挿絵第三図（五四ウ）

四郎との

五郎

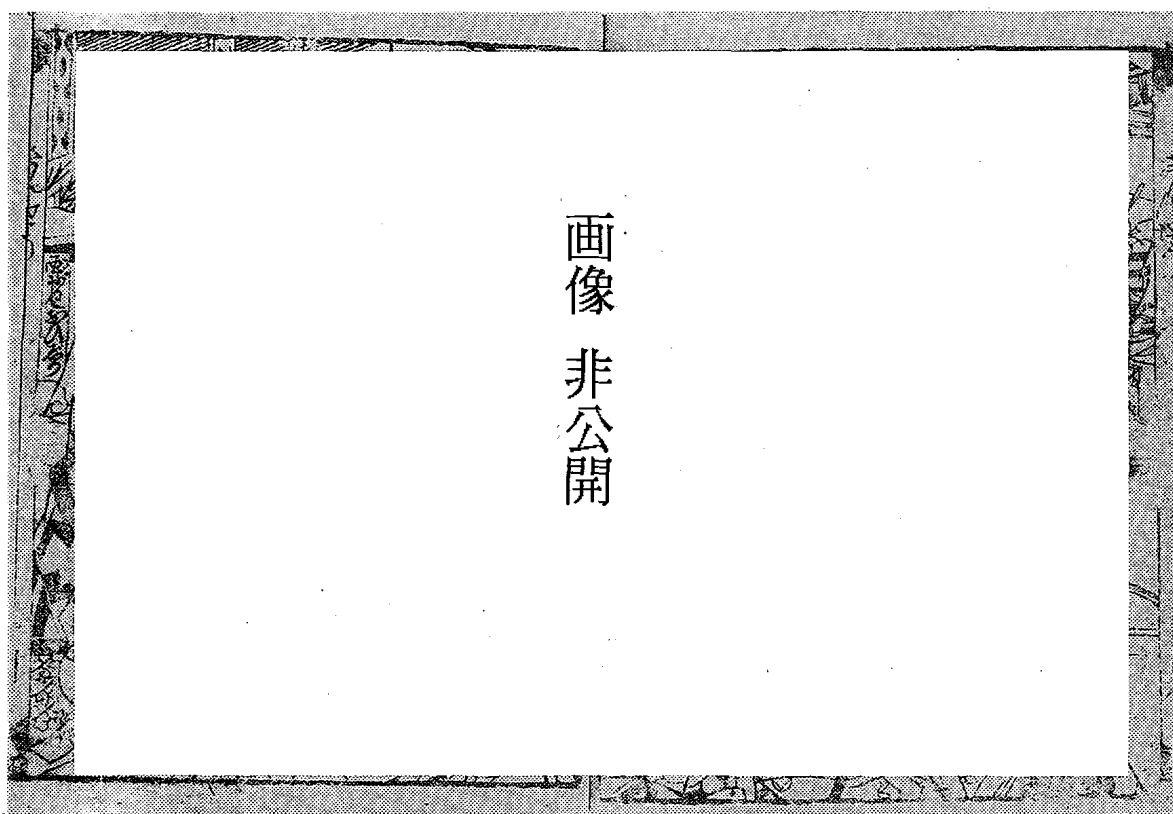
さんせう太夫

次郎きのとく

つし王やきかねあたる

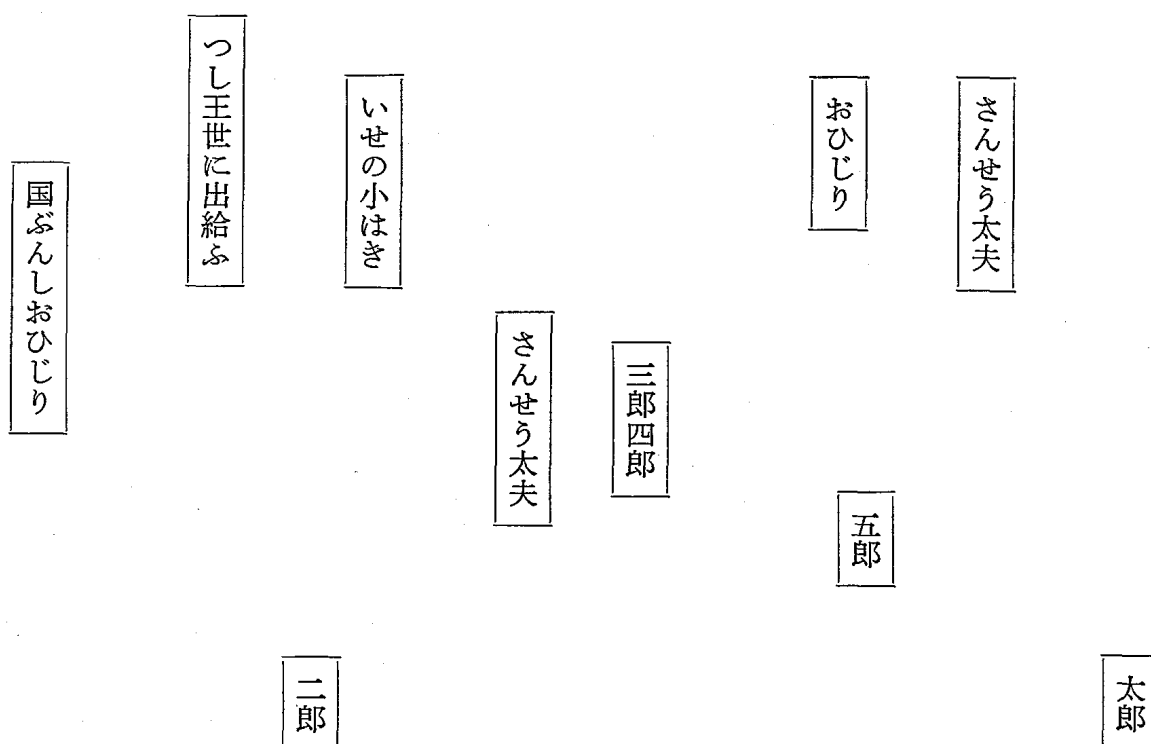
あんしゆ取さくる

三郎やき金あてる



挿絵第六図（十8オ）

挿絵第五図（九7ウ）



注

注1 室木弥太郎『説経集』（新潮社 昭和五十二年）解説では、「段

別のない従来の説経が、浄瑠璃と同じく六段になったのは、遅くも万治元年（一六五八）から」で、このころから説経は「急速に旧作品の改作、それに新作、浄瑠璃の改作も手掛けて、新しい説経の時代を迎える」として、万治・寛文年間の説経浄瑠璃に注目している。

注2 注1掲出書による。本稿中の「寛永板」の本文は同書による。

注3 横山重編『説経正本集』第一（角川書店 昭和四十三年）による。本稿中の「寛文七年版」の本文は同書による。

注4 室木弥太郎『訂語り物（舞・説経）の研究』（風間書房 昭和四十五年）

注5 注4掲出書に、説経と伊勢との関係についての推論がある。

注6 岩崎武夫『続さんせう太夫考―説経浄瑠璃の世界』（平凡社 一九七八年）では、「寛文七年版」の太夫は、「三郎の背後にかくれて陰然たる勢力をふるう、悪の象徴としての不気味な存在」と捉えている。

〔付記〕

糸井文庫閲覧のために舞鶴市役所社会教育課職員品田茂氏の御高配をいただきました。深く感謝致します。

（とりい ふみこ 本学教授）